

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月10日現在

機関番号：32636

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652055

研究課題名（和文） 外国人児童の母国語教育を取り入れた受け入れプログラム研究

研究課題名（英文） Mother-Tongue Programs for Integrating Foreign Children

研究代表者

カイラン・サリコ・ミックマーヒル (C. S. McMahill)

大東文化大学・経営学部・教授

研究者番号：70285071

研究成果の概要（和文）：

外国人生徒が帰国し再び母国に適応するプロセスを明らかにし、より効果的な受け入れプログラムを検討するため、ブラジル、ペルー、アルゼンチンを訪問し、日系人家族に対して質的データを収集し、分析した。結論として日本語教育だけではなく、母語保持・いじめ予防教育やなど、外国人の子供を国や学校レベルでマイノリティとして認め、日本に貢献できる人的資源として歓迎するポリシーが不可欠であることが分かった。

研究成果の概要（英文）：

Qualitative and exploratory research was carried out in Brazil in 2009 and 2010, and in Peru and Argentina in 2010, with 187 Nikkei (Japanese descendent) former economic migrant families to Japan. My research identified these concerns: 1. Limited educational choices and resources in Japan; 2. Difficulties after returning resulting from an assimilative education in Japan; 3. The anti-migrant sentiment perceived in school-based bullying; 4. The long-term negative impact on parent-child relationships.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	0	1,400,000
2010年度	1,200,000	0	1,200,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	60,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・教育学

キーワード：在日日系人生徒、外国人児童・生徒受け入れ、移民者に対する教育政策、バイリンガル教育モデル開発

1. 研究開始当初の背景

日本において、6歳から15歳までの外国人の子どもの不就学という問題に関心が集まり（太田、坪谷 2005）、義務教育を外国籍の子どもにまで適用しない日本の教育基本法

への批判（Nozaki2009）がある。その一方で、多くの外国籍の親たちがいずれ家族そろって日本を離れることを決心しており、そのことが子どもの教育への関心の薄さと結びついているという事実については、ほとんど注

意が払われていない。日本の公立学校は、外国籍の子どもは義務教育の適用から除外されているとして、彼らに対して平等で適切な教育を与える義務から逃れている。外国籍の子どもが公立学校への入学を許可されないというわけではないが、学校には彼らの家族の求めに対して積極的に応える義務もないということである。外国籍の家族が地元にある公立学校の教育に問題を感じていても、高い収入と通学できる範囲のインターナショナルスクールがなければ、代替案を見つけるのは難しい。その結果、自宅で教育を施す、教育を与えない、母国の親戚へ預ける、親の片方もしくは家族全員で帰国する、といった選択が子どものためになされることになる。

## 2. 研究の目的

文化的・言語的多元主義への移行は、個々の教師や指導者の草の根レベルでの努力によって非常にゆっくりと進んでいる。見識の高い教育者の庇護のもとにあるわずかな子どもが「運がいい」とされる一方、ほかの大多数の子どもは支援の欠如に苦しみ、それに抗議するには、結果として学校を中退し、あるいは育った国を離れるしか方法がないのが現状である。移民の教育や権利に関する公的な国家施策を充実させ、抑圧的で活力を奪うような政策を回避するために、今こそ移民の若者やその親たちの声に耳を傾ける時であろう (Paciotto 2009)。日系人をはじめとする移民家族のもの見方や考え方を理解し、より効果的で適切な教育政策と受け入れプログラムを立案するために、南米に帰国した家族に対して現地調査と質的インタビューを行うのが目的であった。

## 3. 研究の方法

外国籍の子どもたちが日本から帰国して再び母国に適応するというプロセスをどのように経験したのかを明らかにするために、ブラジル、ペルー、アルゼンチンを訪問し、日系人家族に対してインタビューとアンケート調査を実施し、質的データを収集した。「帰国生」<sup>1</sup>への現地調査は以下のように実施した。

**(2009年度)** ブラジル人の子ども24人とその親の1人ないし複数に対する詳細なインタビューを実施(実施者: 村元、ミックメーヒル)。

**(2010年度)** ブラジル人の子ども13人に対する詳細なインタビューを村元が実施。そのうち11人は2009年度のインタビュー対象者であり、彼らの親や祖父母に対してもインタビューを実施した。インタビュー対象者は合計65名。ペルーではミックメーヒルが48人の子どもと彼らの親21人、アルゼンチンでは2人

の帰国生に対して、アンケート調査と簡単なインタビューを実施した<sup>11</sup>。また更なるモデルを調べるため、アメリカの公立小学校の中で10~20年ぐらい前から行っている外国語イマージョン教育の現状を4つの都市(ワシントン州シアトル市、ベンリングハム市、タコマ市、オレゴン州ポートランド市)で調査した。

## 4. 研究成果

日本の教育に関して帰国生の親子が不安を示した主な3点を明らかにした。すなわち、1. 日本の教育が同化主義的であるために帰国後困難に直面すること、2. 学校でのいじめに見られる反移民感情、3. 長期的にみた親子関係における負の影響である。これらはそれぞれ、移住の前には想定されていなかった困難や結果とかかわっている。そして、家族や母親が子どもを連れて母国へ戻りしかないと決断につながっていく。日本に移住する日系南米移民の事例は、移民や短期滞在者の言語に関する権利という世界的な問題に日本の教育界の目を向けさせることになるだろう (Wright 2004)。このように、教育における単一言語や単一文化政策が、草の根レベルで批判されているという事実に注目すべきである。これは、単一の言語や国籍が、教育を受ける権利や政治参加の条件であると長い間みなされてきた日本において特に意義深い。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① カイルン・サリコ・ミックメーヒル、村元エリカ、「日本における言語教育環境の移民への影響：日系人帰国生家族の経験から」、(2012年掲載確定 明石書店。早稲田大学移民・エスニック文化研究所主催トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向かって— 国際会議 発表成果論文集)。

② カイルン・サリコ・ミックメーヒル、村元エリカ、“Impacto Educacional sobre as Crianças Retornadas do Japão: Considerações a partir das Famílias Nikkeis Retornadas.” (2012年掲載確定 ブラジル日本学会国際大会。SIMPÓSIO INTERNACIONAL Estudos Japoneses na América Latina - Diálogos, Perspectivas e Projetos Conjuntos 国際会議発表成果論文集)。

③カイルン・サリコ・ミックメーヒル、村元エリカ、“Language educational policy and the children of economic migrants: Learning from the experiences of South American families in Japan.” (2012年掲載確定)、International Society for Language Studies. *ISLS Readings in Language Studies, Volume 3: Language and Identity*

④カイルン・サリコ・ミックメーヒル、“Obstacles to Foreign Children Staying in Japanese Schools: Not Just a Japanese Language Problem.” 平成23年大東文化大学経営学会『経営論集』第21号、99-118項

⑤カイルン・サリコ・ミックメーヒル、「日本滞在時の教育経験を振り返ってー日本からブラジルへ帰国した生徒の現地調査の結果」(Results of a local survey of students who returned to Brazil from Japan: Looking back on educational experiences during the stay in Japan.) (平成22年大東文化大学経営学会『経営論集』第19号、133-149項)

[学会発表] (計3件)

①カイルン・サリコ・ミックメーヒル“Educação dos nikkeis no contexto escolar e lingüístico.” (日系人の学校と言語に関する教育問題)。パネラー発表。サンパウロ市・ブラジル日本学会国際大会 SIMPÓSIO INTERNACIONAL *Estudos Japoneses na América Latina - Diálogos, Perspectivas e Projetos Conjuntos*. 2011年9月27日

②カイルン・サリコ・ミックメーヒル、A Survey of Nikkei Returnee Children to South America: The Need for L1 Maintenance in Japanese Public Schools.” アルバ・International Society for Language Studies 2011 Annual International Conference. 2011年6月25日

③カイルン・サリコ・ミックメーヒル、“A Survey of Nikkei Returnee Children to Peru, Argentina, and Brazil: The need to maintain the Spanish and Portuguese language while residing in Japan.” 東京・早稲田大学、移民・エスニック文化

研究所・日本移民学会。2011年3月5日

その他 科研費の成果を普及した一般市民向けの発表 (計14件)

①カイルン・サリコ・ミックメーヒル 東京・地域国際化協会連絡協議会(財団法人自治体国際化協会)平成23年度地域国際化協会職員国内研修会において、「子供の心のケア〜いじめゼロの取組」の講演をした。2012年1月12日

②カイルン・サリコ・ミックメーヒル 新潟市国際交流協会において「多文化共生を考えるーご近所の外国人」の基調講演をした。2011年12月3日

③カイルン・サリコ・ミックメーヒル 伊勢崎市文化会館において NPO 法人多言語教育研究所主催の シンポジウム「日系人親子への心理支援ーそのニーズと対策」を企画し、司会し、パネラー発表をした。2011年11月5日

④カイルン・サリコ・ミックメーヒル 群馬県太田市 太田市学習文化センターにおいて 群馬県庁国際課多文化共生推進係り多文化共生意識啓発地域ワークショップにて 「外国籍児童生徒の心のケアについて」の講演をした。2011年10月30日

⑤カイルン・サリコ・ミックメーヒル 高崎市国際交流協会にて、「多文化・多言語を持つ子どもの教育について」の研修会を外国人保護者と国際アドバイザーに対して指導した。2011年9月20日

⑥カイルン・サリコ・ミックメーヒル 伊勢崎市 NPO 法人 J-Communication にて、「日本語教育におけるアイデンティティと関係性」を日本語ボランティア教師を対象に研修を指導した。2011年9月7日

⑦カイルン・サリコ・ミックメーヒル 伊勢崎市民プラザにおいて、群馬県庁国際課多文化共生推進係り人権啓発講演会にて、外国人保護者のために “Creando un Arcoiris Gunma- la responsabilidad de los padres internacionales” をスペイン語で発表した。2011年3月15日

⑧カイルン・サリコ・ミックメーヒル

群馬県桐生市 桐生市保健福祉会館多目的ホールにおいて「今こそ考えてほしい「いじめ」・「不登校」そして「子どもの人権」>シンポジウムにて「いじめから子供を守る：多言語・多文化教育のための戦い」について講演した。2011年2月6日

⑨ カイラン・サリコ・ミックマーヒル  
高崎ユネスコにて、小学生、中学生の保護者を対象に「今すぐできる多文化共生ーとなりの外国人ママと仲良くしよう」について講演をした。2011年1月30日

⑩ カイラン・サリコ・ミックマーヒル  
福岡市YWCAにおいて、多文化日本語ボランティア講座の講師をした。2010年10月2日

⑪ カイラン・サリコ・ミックマーヒル  
高崎市観音山ファミリー公園において、高崎市国際交流協会 青少年育成部会の親子勉強会にて、「色々な文化を持っているお友達」について講演をした。2010年7月4日

⑫ カイラン・サリコ・ミックマーヒル  
群馬県沼田市 沼田市国際交流協会において、「多文化共生と子育て子供たちのライフストーリーから学ぶ」について講演をした。2009年12月19日

⑬ カイラン・サリコ・ミックマーヒル  
福岡市YWCAにおいて、多文化日本語ボランティア講座の講師をした。2009年10月31日

⑭ カイラン・サリコ・ミックマーヒル  
前橋市生涯学習センターにおいて、群馬県国際交流財団外国人相談窓口研修会の講師をした。2009年9月25日

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

カイラン・サリコ・ミックマーヒル  
(C.S. McMahon)  
大東文化大学・経営学部・教授  
研究者番号：70285071

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号

<sup>i</sup> 「帰国生」とは、日本の文脈では、外国での滞在を経た後に日本へ戻った日本人の子どもを指して用いられる名称であるが、ここでは日本で出稼ぎとして働いた後、母国へ戻った外国人の子どもを指すものとする。

<sup>ii</sup> 紙幅の都合上、調査によって得られたデータと分析方法の詳細についてはふれることができなかった。それらについては、拙稿 (McMahon 2010, 2011) を参照されたい。